

言語類型論の記述的・理論的研究

研究代表者 高 田 晴 夫

1. プロジェクトメンバー（平成26年9月現在）

高 田 晴 夫（代表者）

秋 孝 道

三 井 正 孝

土 橋 善 仁

磯 貝 淳 一

江 畑 冬 生

藤 石 貴 代

駒 形 千 夏

中 村 隆 志

大 竹 芳 夫（協力者・経済学部）

成 田 圭 市（協力者・教育学部）

本 間 伸 輔（協力者・教育学部）

朱 継 征（協力者・経済学部）

池 田 英 喜（協力者・国際センター）

2. プロジェクトの概略（2013年4月1日～2014年3月31日）

言語類型に関わる基礎研究について、研究会等で、議論・検討を行った。以下はその概略である。

3. プロジェクトの成果

1. 平成25（2013）年5月14日（火）

新潟大学言語研究会・人文学部プロジェクト「言語類型の記述的・理論的研究」、現社研プロジェクト「言語の普遍性と個別性」、新潟大学コアス

テーション言語科学研究センター共催（以下同様）

1. 発表者：江畑冬生（新潟大学人文学部准教授）

題目：「形態素タイプの問題：北東ユーラシア諸言語の派生接辞の特質を中心に」

2. 発表者：磯貝淳一（新潟大学人文学部准教授）

題目：「注釈文体の系譜—古往来における『東山往来』の位置づけを中心に—」

2. 平成25（2013）年7月22日（月）

1. 発表者：トゥヤーラ・ペルミャコーヴァ（ロシア北東連邦大学・外国文学・地域研究学術院日本語専任講師）

題目：「サハ語とサハ文学：昔と現代」（日本語で発表）

3. 平成25（2013）年10月17日（木）

1. 発表者：ジョージ・オニール（新潟大学教育・学生支援機構准教授）

題目：「国際通用語としての英語における通じない発音（Unintelligible Pronunciation in English as a Lingua Franca）」

2. 発表者：佐々木典子（新潟大学教育学部大学院修士課程教育学研究科2年）

題目：「英語の have 使役構文の構造と意味について」

4. 平成25（2013）年12月18日（水）

1. 発表者：武久智一（新潟薬科大学薬学部 准教授）

題目：「An idiomatic argument for the common base approach to Japanese causative/inchoative verbs」

2. 発表者：付改華（新潟大学大学院現代社会文化研究科博士後期課程3年）

題目：「日本語における主語省略の制約要因について」

5. 平成26(2014)年3月18日(火)

1. 発表者：三井正孝(新潟大学人文学部 准教授)

題目：「近代語にみる〈ニオケル〉」

2. 発表者：佐藤愛子(新潟大学非常勤講師)

題目：「映画を使って英語を学ぶ 映画を使って英語を教える」

4. 2013年4月1日～2014年3月末までの教員の研究成果一覧(ア順)

秋 孝道

論文

1. 「日本語の連用形転用名詞のアクセント変化について」,

『平成24年度人文社会・教育科学系研究支援経費(学系基幹研究)「節
両縁部に現れる話題表現と焦点表現に関する実証的・理論的研究」平
成25年度人文社会・教育科学系研究支経費(学系基幹研究)「話題・焦
点表現の統語的認可と内部統語構造に関する実証的・理論的研究」研
究成果報告書』, 平成24(2014)年3月, 33-42

磯貝淳一

口頭発表

1. 「注釈文体の系譜 — 古往来における『東山往来』の位置づけを中心に
—」, 新潟大学言語研究会(新潟大学人文学部：平成25(2013)年5
月)

2. 「疑問表現からみた和化漢文の文体 — 仏家「記録文」の位置づけをめ
ぐって —」, 第109回訓点語学会研究発表会(東京大学山上会館：平
成25(2013)年10月)

講演

1. 「『書き方』はどのように学ばれてきたのか — 教科書としての往来物の
編纂と文体の問題 —」, 平成25年度新潟県ことばの会(新潟大学教育
学部：平成25(2013)年11月)

江畑冬生

論文・研究ノート

1. “Quasi-mermaid construction in Sakha(Yakut).” Tasaku Tsunoda(ed.) *Adnominal clauses and the ‘Mermaid construction’ : Grammaticalization of Nouns.*(NINJAL Collaborative Research Project Reports 13-01). 537-549. (平成25 (2013) 年4月)
2. “Causative and passive in Sakha: Focusing on double-accusative causative and impersonal passive.” *Tomsk Journal of Linguistics and Anthropology.* 2013. 2(2). 16-28. (平成25 (2013) 年5月)
3. “Bare nominal secondary predicate in Sakha(Yakut).” *Altai Hakpo.* 23. 179-189. (平成25 (2013) 年6月)
4. 「統語法から見た日本語動詞の活用体系」『人文科学研究』第133輯. 1-19. (平成25 (2013) 年12月)
5. “Propriative affixes in the languages of Northeastern Eurasia: An overview.” *Tomsk Journal of Linguistics and Anthropology.* 2014. 1(3). 9-14. (平成26 (2014) 年2月)
6. The Sakha propriative suffix -LEEx. *Tomsk Journal of Linguistics and Anthropology.* 2014. 1(3). 23-34. (平成26 (2014) 年2月)
7. 「ウワロフスキによる最古のサハ語文の特徴」『北方人文研究』第7号, 55-69. (研究ノート, 平成26 (2014) 年3月)
8. 「北東ユーラシア諸言語の名詞項標示」『北方言語研究』第4号, 1-4. (平成26 (2014) 年3月)
9. 「サハ語・トルコ語・トゥバ語の目的語格標示」『北方言語研究』第4号, 33-42. (平成26 (2014) 年3月)
10. 「形態素タイプの認定—日本語動詞の活用を例に—」『日本エドワード・サビア協会 研究年報』第28号, 29-39. (平成26 (2014) 年3月) 学会発表
1. 「サハ語(ヤクート語)の引用における対格名詞句」日本言語学会第146回大会(平成25 (2013) 年6月)

2. 「チュルク諸語における目的語格選択の要因:サハ語を中心に」 日本言語学会第146回大会ワークショップ 北東ユーラシア諸言語の名詞項標示 (平成25 (2013) 年6月)
3. The nature words in Sakha, compared with other Turkic languages. “Global Warming and the Human-Nature Dimension in Siberia: Social Adaptation to the Changes of the Terrestrial Ecosystem, with an Emphasis on Water Environments” Institute for Biological Problems of Cryolithozone, Siberian Branch of RAS, Yakutsk, Russia. (平成25 (2013) 年10月)
4. 「形態素タイプ認定の問題 -日本語動詞の屈折を中心に-」 日本エドワード・サピア協会第28回研究発表会 (平成25 (2013) 年10月)
5. Quoted imperative statements in Sakha --Between direct and indirect speeches-- “The 11th Seoul International Altaistic Conference” Seoul National University, Korea. (平成 (2013) 年12月)
6. Polyfunctionality of verbal endings in Turkic. “NINJAL Typology Festa 2014” National Institute for Japanese language and linguistics. (平成26 (2014) 年2月)

共著書

1. 「第7章 サハ民話と伝承」 山田仁史・永山ゆかり・藤原潤子 (編) 『水・雪・氷のフォークロア 北の人々の伝承世界』 187-216. 勉誠出版. (平成26 (2014) 年3月)
2. 「言語 - 身体が生み出し, 心を伝える」 栗原隆 (編) 『感性学 触れ合う心・感じる身体』 191-209. 東北大学出版会. (平成26 (2014) 年3月)

その他

1. 日本言語学会 大会発表賞 (平成25 (2013) 年6月)

土橋善仁

単著論文

1. “Autonomy of prosody and prosodic domain formation: A derivational

approach”, *Linguistic Analysis*, Vol. 38, No.3-4, 331-355 (平成25 (2013)年11月)

共著論文

1. (Hisao Tokizaki, Yoshihito Dobashi) “Introduction to Universal Syntax and Parametric Phonology”, *Linguistic Analysis*, Vol. 38, No.3-4, 147-151. (平成25 (2013)年11月)

口頭発表

1. 共同 (Changguk Yim, Yoshihito Dobashi) “Recursive i-phrasing and yo-particle in Korean: A derivational approach”, 9th Workshop on Altaic Formal Linguistics, Cornell University, Ithaca, NY. (平成25年 (2013)年8月)

新たな「公共圏」モデルの構築

研究代表者 渡 邊 登

1. 分担者名 (人文学部の教員〈現社研主担当を含む〉)

佐 藤 康 行
原 田 健 一
中 村 潔
松 井 克 浩
古 賀 豊
杉 原 名穂子
中 村 隆
北 村 順 生